

会報

# 国鉄闘争全国運動

国鉄分割・民営化反対！ 1047名解雇撤回！

第50号  
2014年7月15日

国鉄分割・民営化に反対し 1047名解雇撤回闘争を支援する全国運動事務局  
千葉市中央区要町2-8 DCC会館内  
TEL 043-2222-7207  
nationwidemovement@yahoo.co.jp

## 解雇撤回・JR復帰を求める最高裁署名 5万9195筆(14年7月15日現在)

# 戦争と民営化を撃つ 全国で国鉄集会を!

国鉄闘争全国運動の今秋の課題と方針は、6・8全国集会の成功と10万筆署名運動の前進を基盤にして各地域で国鉄集会を企画・開催し、地域・職場に分け入って組織化に入り、もうひとまわり大きな運動をつくることです(事務局)。



## 7・2出向命令無効確認訴訟第7回 契約書を明らかにしろ

7月2日、動労総連合の出向命令無効確認訴訟の第7回裁判が行われました。今回、JR側から組合側の主張に対する反論が提出されました。JR側はいまだに「高齢者の雇用の場の確保及び技術力の世代間継承」が目的と主張しています。しかし外注化した作業・構内業務には強制出向者に加えて千葉だけで2年で26人のプロパー社員が入っています。「雇用の場の確保」ではなく雇用の場の破壊以外のなにものでもありません。そもそも「高齢者の雇用の場の確保」のためならJRでやれば済むことではなのです。偽装請負も「関係ない」、作業責任者も「(JR)同等の知識、経験は

必要ない」と主張しています。しかし、作業責任者に十分な知識・経験がなければトラブルに対応できません。これで丸投げ外注化すれば安全は崩壊します。

弁護団の追及にJRと裁判所は追い詰められ、裁判長はJRに「任意で委託契約書の提出を」と打診。JR側は「次回までに前向きに検討する」と言わざるを得なくなりました。

今回は、組合側から本格的な反論を行います。JRと裁判所をさらに追い詰めよう。

◎次回 出向無効確認訴訟  
10月8日(水) 11時30分  
東京地裁577号法廷

具体的実体的な運動の形成と前進こそが4者4団体の路線を打破して労働運動を再生していくのです。6・8集会における韓国鉄道労組からの報告もそのことを示しました。鉄道民営化をめぐる闘いこそ新自由主義への反撃の決定的デモであることを見せてくれました。

情勢も、国鉄分割・民営化以来の新しい自由主義的展開と膨張はあきらかにピークを越え、矛盾が全面的に爆発していく過程に入っています。それは何よりも階級支配の危機を生みだし、とりわけ労働者階級の流動化と労働運動の再編情勢―新たな労働組合運動の再生・形成の可能性として進んでいきます。

「職場に階級的労働運動の芽をつくりだすこと」へ日本労働者階級の主体的な転換をつくりだすこと」が国鉄闘争全国運動の使命です。この情勢に対して労働運動再生の決定的な戦略として国鉄闘争全国運動を位置づけたらと思います。

(3)

集团的自衛権行使容認7・1閣議決定は、情勢をさらに転換させました。日本の労働者にとって「戦争」は決定的な問題です。戦争の記憶が残る世代にとっても、これから戦場に送り込まれる若い世代にも真に重大な問題です。安倍政権はこのことを完全に見過ごしています。

7・1は歴史的な分岐点です。実質的に憲法9条がなきものに

され、戦後69年間のあり方が一変していきます。秋以降に閣議法案が次々と国会で審議され、教育や自治体、労働法制、司法などすべてを一変させる攻撃の攻防に入っていきます。

中曽根元首相は「国鉄分割・民営化によって労働運動を解体して改憲を実現する」と公言しました。今まさにそれが問題になっています。すべては国鉄分割・民営化から始まりました。労働運動の後退に次ぐ後退に重ねて戦争政策は進んできました。今こそ労働運動を復権させることが必要なのです。労働運動を復権させることが真に戦争をとめる力になることを決意として国鉄闘争全国運動を進めたいと思います。

国鉄闘争全国運動が少しずつ求心力を持ち始めています。一歩も原則を譲らずに闘いぬいてきたことがついに情勢とかみ合いい、労働者を獲得する力となっていく「兆し」が見えてきました。6・8集会でそのことを感じた人も多いと思います。6・8集会と署名運動の地平の上に、「今だからこそ労働運動をよみがえらせよう」と本気になって地域・職場に分け入ろう。

「この程度で」という感覚を打破して、私たち自身が本気になるかどうか問題になってきます。安倍政権に対して労働者の怒りと危機感が猛烈にわきあがっています。これとどう結合するのか。もうひとまわり大きく組織して、5割増し10割増しの結集で地域の国鉄集会を実現しようではありませんか。そのために議論も方針も実践もあと一歩ずつ突破していくことを訴えます。

(1)  
6・8集会で署名運動は、「国鉄闘争の火を消すな」の呼びかけを発して国鉄闘争全国運動を4年間、必死に展開してきた意義とその地平を示しています。

4・9政治和解は、文字通り国鉄闘争と日本労働運動の息の根を止める攻撃でした。このギリギリのタイミングで「国鉄闘争の火を消すな」という呼びかけを発し、1047名の当該である動労千葉や和解を拒否した国鉄闘争団員をはじめ、関西生コン支部や港合同など不屈に闘ってきた労働組合とその指導者、学者や弁護士など諸人士の呼びかけで国鉄闘争全国運動がスタートしました。

何より国鉄闘争を継続すること、そして国鉄闘争の支援・共闘を土台に新自由主義と闘う労働運動を創成することを旗印に4年間、必死に闘ってきました。その決定的な成果が1047名解雇をめぐる動労千葉の裁判において一昨年の6・29地裁判決と昨年の9・25高裁判決で「解雇は不当労働行為」の歴史的な判決をかちとったことです。

さらに国鉄とJR設立委員会が共謀して選別解雇を行った決定的事実を暴き出しました。1047名解雇撤回闘争は、4・9政治和解をのりこえ裁判所に「解雇は不当」と認定させる地平に到達したのです。

国鉄闘争全国運動は、裁判闘争の展開にあわせて署名運動を提起し、呼びかけ人などの陣形をさらに拡大して、全国の草の根レベルで国鉄闘争支援陣形を結合・拡大して、国鉄闘争の支援と連帯・共闘の具体的な運動展開をつくりだしました。新自由主義と闘う階級的労働運動の実践的運動化・組織化の展望を生み出しました。

全国運動や署名運動には、「国鉄闘争の火を守れ」「日本の労働運動を防衛しよう」という強い情熱をもった多くの労働組合や人びとが結集し、新たな労働運動の可能性を見出しています。6・8集会の熱気はそれをはつきりと示しています。

(2)  
「国鉄闘争の火を消すな」というある意味において防衛的要素が、情勢や労働者の意識の変化と結びついて新自由主義と闘う労働運動の可能性という積極的な要素に転じつつあります。

この4年間の苦闘と地平は何を示すのか。4・9政治和解はいかにして突破されたのか。国鉄闘争全国運動は、国鉄闘争という日本階級闘争・労働運動のもっとも核心的かつ最長最大の闘いを結果的に、日本の労働運動のもっとも階級的戦闘的要素を結果しながら、必死に職場生産点から団結と闘いを組織して、互いに励まし合いながら、全国の地域・職場に根ざした労働運動再生の運動として展開してきたのです。まさに国鉄闘争の歴史的地平とその階級的底力を示すものです。

国鉄分割・民営化に対してストライキで闘いぬき団結と組織を維持し、現在のには鉄道業務の丸ごと外注化に対して、「正規・非正規」の分断を突破して組織拡大に踏み出した動労千葉の闘いをひとつの牽引力に、国鉄闘争全国運動という具体的実体的な運動と組織をつくりだしたことが4・9政治和解をのりこえる地平です。

具体的実体的な運動の形成と前進こそが4者4団体の路線を打破して労働運動を再生していくのです。6・8集会における韓国鉄道労組からの報告もそのことを示しました。鉄道民営化をめぐる闘いこそ新自由主義への反撃の決定的デモであることを見せてくれました。

情勢も、国鉄分割・民営化以来の新しい自由主義的展開と膨張はあきらかにピークを越え、矛盾が全面的に爆発していく過程に入っています。それは何よりも階級支配の危機を生みだし、とりわけ労働者階級の流動化と労働運動の再編情勢―新たな労働組合運動の再生・形成の可能性として進んでいきます。

「職場に階級的労働運動の芽をつくりだすこと」へ日本労働者階級の主体的な転換をつくりだすこと」が国鉄闘争全国運動の使命です。この情勢に対して労働運動再生の決定的な戦略として国鉄闘争全国運動を位置づけたらと思います。

(3)

集团的自衛権行使容認7・1閣議決定は、情勢をさらに転換させました。日本の労働者にとって「戦争」は決定的な問題です。戦争の記憶が残る世代にとっても、これから戦場に送り込まれる若い世代にも真に重大な問題です。安倍政権はこのことを完全に見過ごしています。

7・1は歴史的な分岐点です。実質的に憲法9条がなきものに

され、戦後69年間のあり方が一変していきます。秋以降に閣議法案が次々と国会で審議され、教育や自治体、労働法制、司法などすべてを一変させる攻撃の攻防に入っていきます。

中曽根元首相は「国鉄分割・民営化によって労働運動を解体して改憲を実現する」と公言しました。今まさにそれが問題になっています。すべては国鉄分割・民営化から始まりました。労働運動の後退に次ぐ後退に重ねて戦争政策は進んできました。今こそ労働運動を復権させることが必要なのです。労働運動を復権させることが真に戦争をとめる力になることを決意として国鉄闘争全国運動を進めたいと思います。

国鉄闘争全国運動が少しずつ求心力を持ち始めています。一歩も原則を譲らずに闘いぬいてきたことがついに情勢とかみ合いい、労働者を獲得する力となっていく「兆し」が見えてきました。6・8集会でそのことを感じた人も多いと思います。6・8集会と署名運動の地平の上に、「今だからこそ労働運動をよみがえらせよう」と本気になって地域・職場に分け入ろう。

「この程度で」という感覚を打破して、私たち自身が本気になるかどうか問題になってきます。安倍政権に対して労働者の怒りと危機感が猛烈にわきあがっています。これとどう結合するのか。もうひとまわり大きく組織して、5割増し10割増しの結集で地域の国鉄集会を実現しようではありませんか。そのために議論も方針も実践もあと一歩ずつ突破していくことを訴えます。

# 集団的自衛権行使容認の閣議決定弾劾

## 動労千葉など官邸前で抗議行動

安倍内閣が集団的自衛権行使容認の憲法解釈変更の閣議決定を強行した7月1日は、文字通り戦後階級闘争の歴史的転換点となった。

この「新たな戦争」への突入に対して、動労千葉は全国の仲間とともに首相官邸前で抗議闘争を闘った。

閣議決定では「大量破壊兵器や国際テロなどの脅威が世界のどの地域において発生しても、わが国の安全保障に直接的な影響を及ぼす」と言い放った。

さらに「わが国の存立が脅かされ、国民の生命、自由および幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある場合において必要最小限度の実力を行使すること」は、「自衛のための措置として憲法上許容される」として、憲法9条を解体し、全世界に対する戦争宣言を行ったのです。

6月29日には、JR新宿駅南口で労働者が閣議決定強行に反対して焼身抗議を行った。6月30日、7月1日には、合わせて10万人にもなる安倍への怒り、戦争への怒りが首相官邸前を埋め尽くした。

これを安倍首相をはじめとしたわずか19人の閣僚が行ったのである。労働者をなめきった安倍の閣議決定に全国・全世界で怒りの闘いが始まった。



特に閣議決定強行以降、仕事を終えた若者が

続々と官邸前に結集した。「戦場に行かされるのは俺たちだ」「戦争するな!」「閣議決定撤回!」「安倍やめろ!」の怒りのコールが深夜まで鳴り響き、「生きるための団結」した闘いが新しく始まったのだ。

問われているのは労働組合の闘いだ。国鉄分割・民営化を強行した中曽根は「国労をつぶし、総評・社会党を崩壊させ、お座敷をきれいにして床の間に新憲法を安置する」と改憲・戦争の狙いを語った。国鉄闘争は改憲・戦争を阻止する労働者の闘いでもあったのだ。

今こそ国鉄闘争が問われている。安倍の民営化・戦争と対決する国鉄闘争を全国各地につくり出そう。

てまったく取り合いません。しかも、動労水戸が、会社が被ばくの基準とする「一日1ミリシーベルト・年間20ミリシーベルト」は放射線従事者の基準ではないかと追及したことに対し、会社は「乗務員は放射線従事者だ」と無茶苦茶な回答をしています。

労働者がいくら被曝しても構わないという会社の対応に、職場からは「会社に命までは売っていない」と怒りの声が上がっています。

また転落死亡事故からわずか8分後に、電力指令(JR)が「き電」した(1500Vの電流を流した)が、安全装置が起動したために送電が止まるという、あやむかやむの二次的事故も起きている。

この数日でも、JR北海道の江差線で貨物列車脱線(6月22日)、JR九州では指宿市で観光特急が土砂に乗り上げ脱線(6月21日)負傷者が多数出るなど大事故が相次いでいる。

さらに7月6日にはJR室蘭線で、札幌発函館行きの特急「スーパー北斗18号」の配電盤から発煙があり、緊急停止するという重大事故が起きている。

JR東日本でも川崎駅衝突・脱線事故(2月23日)の後、保守用車脱線(相模線橋本駅構内)、線路閉鎖の事故(品川、池袋)、山手線列車から白煙な

ど、まさに「JR安全崩壊」が止めどなく進行している。すべては、JRが利益を優先して外注化を推し進め、一切の責任を放棄していることよって起こっているのだ。

また、列車運行が優先される限り、外注化は必ず偽装請負となる。

安全は外注化の弱点 動労千葉は、15年間の外注化阻止の闘いの中で、安全問題こそ外注化の最大の弱点であることをつかんだ。

5月2日には、採用からわずか1年、たった6カ月の訓練で列車の重要な検査(仕業検査)をやらされようとしている外注会社の労働者を守るべく、動労千葉はストライキで闘った。事故の責任を転嫁され、使い捨てにされる外注先の労働者を守るために、JRの労働者がストライキで闘ったのは初めてだ。

この闘いは、外注先で働く労働者とJR本体で働く労働者との強い団結を生み出している。安全と命の問題は、本体と外注先の労働者の共通の課題であるからだ。

# JRの安全崩壊と闘い外注化を止めよう

## 止まらぬ安全崩壊

6月14日午前3時33分、JR東日本京浜東北線の神田駅付近で電力の吊架線(ちようかせん)で電力線を吊すケーブル(フル)新設作業中に1名の労働者が高架下に墜落し死亡する痛ましい事故が起きた。

亡くなったのは作業班6名中、最も若く経験も浅い21歳の青年労働者だ。

この工事は、JR東日本の委託で日本電設工業が工事責任者1名を出し、作業責任者ら5名は明和電工(孫請け)という典型的な「丸投げ外注化」で行われた。

また転落死亡事故からわずか8分後に、電力指令(JR)が「き電」した(1500Vの電流を流した)が、安全装置が起動したために送電が止まるという、あやむかやむの二次的事故も起きている。

この数日でも、JR北海道の江差線で貨物列車脱線(6月22日)、JR九州では指宿市で観光特急が土砂に乗り上げ脱線(6月21日)負傷者が多数出るなど大事故が相次いでいる。

さらに7月6日にはJR室蘭線で、札幌発函館行きの特急「スーパー北斗18号」の配電盤から発煙があり、緊急停止するという重大事故が起きている。

JR東日本でも川崎駅衝突・脱線事故(2月23日)の後、保守用車脱線(相模線橋本駅構内)、線路閉鎖の事故(品川、池袋)、山手線列車から白煙な

# 架線作業中に転落死亡事故 JR京浜東北線神田駅付近 丸投げ外注化が青年の生命奪う

また、列車運行が優先される限り、外注化は必ず偽装請負となる。

安全は外注化の弱点 動労千葉は、15年間の外注化阻止の闘いの中で、安全問題こそ外注化の最大の弱点であることをつかんだ。

5月2日には、採用からわずか1年、たった6カ月の訓練で列車の重要な検査(仕業検査)をやらされようとしている外注会社の労働者を守るべく、動労千葉はストライキで闘った。事故の責任を転嫁され、使い捨てにされる外注先の労働者を守るために、JRの労働者がストライキで闘ったのは初めてだ。

この闘いは、外注先で働く労働者とJR本体で働く労働者との強い団結を生み出している。安全と命の問題は、本体と外注先の労働者の共通の課題であるからだ。

5・2ストライキでもって、JRの全面外注化を粉砕し、仕事も労働者もJRに戻させる新たな闘いが始まった。JRと外注会社を貫く組織拡大の実現に向かって、動労千葉の闘いは大きく前進している。

職場から安全崩壊の現実と闘うこと、この闘いこそが外注化を粉砕し、労働者の命を守る道だ。「解雇撤回・JR復帰」の10万筆署名運動と職場からの合理化・運転保安闘争で動労千葉・動労総連合の組織拡大を実現し、国鉄分割・民営化に決着をつけよう。

## 常磐線・竜田乗り入れをやめろ!

## 動労水戸が第3波スト



JR常磐線の竜田延伸が強行されて1カ月が経った6月30日、国鉄水戸動力車労働組合(動労水戸)は「帰還と被ばくを強制する竜田乗り入れ中止!」を掲げて第3波のストライキに決起しました。

動労水戸の闘いによって「帰町宣言なき運行再開」を強いられたJR東会社・水戸支社はますます矛盾を深めています。

竜田駅までは1日9往復で、乗客はたった150人しかいないとのこと。一回の運行で平均8人ほどしか乗らない計算です。JR水戸支社は、当初は「槽

葉町の帰町判断が出れば運行再開する」と言っていたにもかかわらず、動労水戸との交渉では運転再開の目的を「復興のため」とすり替えています。

誰も望んでいない運行再開という事実から目をそらし、安倍政権の「安全キャンペーン」福島島の分断と切り捨てに鉄道と労働者を利用していることがますます明らかになっています。

命を守るスト 動労水戸の闘いは、実際に運行を強制され、被ばく労働を強制されている青年労働者の怒りと呼び覚ましています。

竜田乗り入れがいかにか無謀で無責任なのか。 竜田まで乗務する乗務員は線量計を2つ持って乗務し、高い数値が出て、会社は今までと同じく「線量計の故障だ」と言っ

てまったく取り合いません。しかも、動労水戸が、会社が被ばくの基準とする「一日1ミリシーベルト・年間20ミリシーベルト」は放射線従事者の基準ではないかと追及したことに対し、会社は「乗務員は放射線従事者だ」と無茶苦茶な回答をしています。

労働者がいくら被曝しても構わないという会社の対応に、職場からは「会社に命までは売っていない」と怒りの声が上がっています。

また転落死亡事故からわずか8分後に、電力指令(JR)が「き電」した(1500Vの電流を流した)が、安全装置が起動したために送電が止まるという、あやむかやむの二次的事故も起きている。

この数日でも、JR北海道の江差線で貨物列車脱線(6月22日)、JR九州では指宿市で観光特急が土砂に乗り上げ脱線(6月21日)負傷者が多数出るなど大事故が相次いでいる。

# JRの安全崩壊と闘い外注化を止めよう

また、列車運行が優先される限り、外注化は必ず偽装請負となる。

安全は外注化の弱点 動労千葉は、15年間の外注化阻止の闘いの中で、安全問題こそ外注化の最大の弱点であることをつかんだ。

5月2日には、採用からわずか1年、たった6カ月の訓練で列車の重要な検査(仕業検査)をやらされようとしている外注会社の労働者を守るべく、動労千葉はストライキで闘った。事故の責任を転嫁され、使い捨てにされる外注先の労働者を守るために、JRの労働者がストライキで闘ったのは初めてだ。

この闘いは、外注先で働く労働者とJR本体で働く労働者との強い団結を生み出している。安全と命の問題は、本体と外注先の労働者の共通の課題であるからだ。

5・2ストライキでもって、JRの全面外注化を粉砕し、仕事も労働者もJRに戻させる新たな闘いが始まった。JRと外注会社を貫く組織拡大の実現に向かって、動労千葉の闘いは大きく前進している。

職場から安全崩壊の現実と闘うこと、この闘いこそが外注化を粉砕し、労働者の命を守る道だ。「解雇撤回・JR復帰」の10万筆署名運動と職場からの合理化・運転保安闘争で動労千葉・動労総連合の組織拡大を実現し、国鉄分割・民営化に決着をつけよう。